

調査研究から情報発信へ 4年目を迎え大幅な組織改編

It Is Time for Us to Present Our Results at Large

成果の公表、発信にむけて

福田 アジオ FUKUTA Ajio

私たちのプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」もいよいよ4年度目に入った。21世紀COEプログラムは5年間の事業として始められたが、3年目に21世紀COEプログラム委員会の中間評価を受けて、後半の継続可否が判定されることになっている。私たちのプログラムも昨年度にその中間評価を受けた。本プログラムの運営を担当している者は1年間ほぼ完全にそのことに追われたと言って良い。中間評価のための審査用書類作成から始まって、ヒアリングの準備、ヒアリング、現地調査の準備と、多大のエネルギーを費やしたことは間違いない。幸いにして、中間評価では、後半2年間の事業継続を認められた。ヒアリングや現地調査において委員から様々な問題点の指摘や改善すべき点についての助言があった。そして、最終的には中間評価の4段階のうちの第2段階、一般に言うB評価を貰った。Aの評価でなかったことは非常に残念であったが、とりまとめ役としては取りあえずホッとしたことは事実である。そして、中間評価のヒアリングや現地調査で出された意見、また最終評価書に記載されたコメントに対応すべく、私たちのプログラムの活動内容を点検し、目標達成のための大幅な組織組み替えを含む見直し作業を行い、後半2年間の事業について新たな体制をつくり出した。

私たちは、21世紀COEプログラム委員会による中間評価とは別に、自分たちの判断として外部評価委員を専門研究者に委嘱して、毎年度末に外部評価を実施してきた。現在までに3回外部評価を受けたことになる。外部評価委員は毎回適切であるが厳しい注文を出してくださった。それぞれについて翌年度には改善を施してきた。毎回の外部評価で最も問題になったのは次の2点であった。第1は、私たちのプログラムの4班編制について、具体的な研究活動を行う三つの班と情報発信を行う班との連携が適切になされていないことが指摘された。第2には、調査研究が進められているにも拘わらず、その成果を研究世界で広く共有するためのデータベースの構築・公開が進んでいないことが大きな問題であるとされた。

私たちのプログラムは、申請段階から、5年間の事業を、調査研究をして資料を集積し、解析する前半と獲得した資料を総合し、体系化して情報発信する後半に大きく分けていた。前半部の進捗状況に対して21世紀COEプログラム委員会からの中間評価がなされ、体系化への取り組みが弱いという指摘が出されたのは、研究の全体計画から言えば、やむを得ないことであった。私たちが後半に展開しようとしていたことについて、前半の達成内容から不足・不十分を指摘されたのである。この点は、外部評価の指摘においても同様で、前半の調査研究段階に全体的な統合の不足やデータベース構築の遅れを指摘されたのである。それらは後半の重点課題であることは既に計画段階から表明していた。したがって、厳しい指摘に対しては、いずれも後半の事業計画に位置づけられ、間違いなく達成することになっているという回答で終わっても構わないものであった。

しかし、中間評価や外部評価において指摘された多くの問題点は事実であり、前半だから許されるという問題だけではなかったことも明らかである。また、私たちもそれらのことを強く感じていた。そこで、後半の目標達成をより確実にするために大幅な組織改編を行うことにし、一部は昨年秋からそれに移行し、全面的には本年4月から開始した。その組織改編の眼目は、個別課題における調査研究の成果を発信する責任体制の明確化、 図像、身体技法、環境・景観の三つの非文字資料を総合し、体系化して発信することを任務とした組織への改組、の二つであった。前者は一見すると研究を個別化するように見え、後者は逆に研究を大きく総合する活動に思え、全く違った方向を目指しているように見えるが、調査研究の成果を確かなものにすると同時に体系化して情報発信するための工夫であった。

私たちの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は非文字資料すべてを扱い体系化するのではなく、図像、身体技法、環境・景観の三つに絞り、調査研究を経て、総合し、体系化することを計画段階から掲げてきた。それが第1班の図像資料の体系化と情報発信、第2班の身体技法および感性の資料化と体系化、第3班の環境と景観の資料化と体系化である。当初から各班には三つの課題が設定され、調査研究に取り組んできたが、研究担当者や予算執行は班単位であり、課題の追究状況は外部からは必ずしも明確にはうかがわれなかった。そこで今までの調査研究の成果をとりまとめ、総合し、情報発信するための組織として課題を中核に据え、人員と予算執行を課題単位にすることとした。課題の責任の下にデー



データベースの構築、資料の総合を行い、それを基礎に各班は班の当初目標を作り上げることになる。

そして、過去3年間、第4班文化情報発信の新しい技術の開発という名称で、総合化・体系化そして情報発信を担う班を組織し、活動してきたが、中間評価や外部評価での厳しい指摘を受けて、各班・各課題と連携して非文字資料の総合・体系化を進め、情報発信するために新たに三つの班に再編成することにした。すなわち、第4班の地域統合情報発信、第5班の実験展示、第6班の理論総括研究である。いずれの班も、今までの4班の研究担当者を中核に、1班から3班までで活動してきた担当者を加えて編成されている。特定の地域において総合し、体系化した非文字資料を、地域から発信する第4班、展示という方法によって非文字資料を総合し、発信する第5班、そして文字資料をも念頭に置いて理論的に非文字資料を体系化し、情報発信する理論総括研究班である。

これらの組織を示すと以下の通りになる。

第1班 画像資料の体系化と情報発信

- 1-1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さん刊行
- 1-2 『日本近世・近代生活絵引』の編さん
- 1-3 『東アジア生活絵引』の編さん

第2班 身体技法および感性の資料化と体系化

- 2-1 身体技法の比較研究
- 2-2 用具と人間の動作の関係の分析

第3班 環境と景観の資料化と体系化

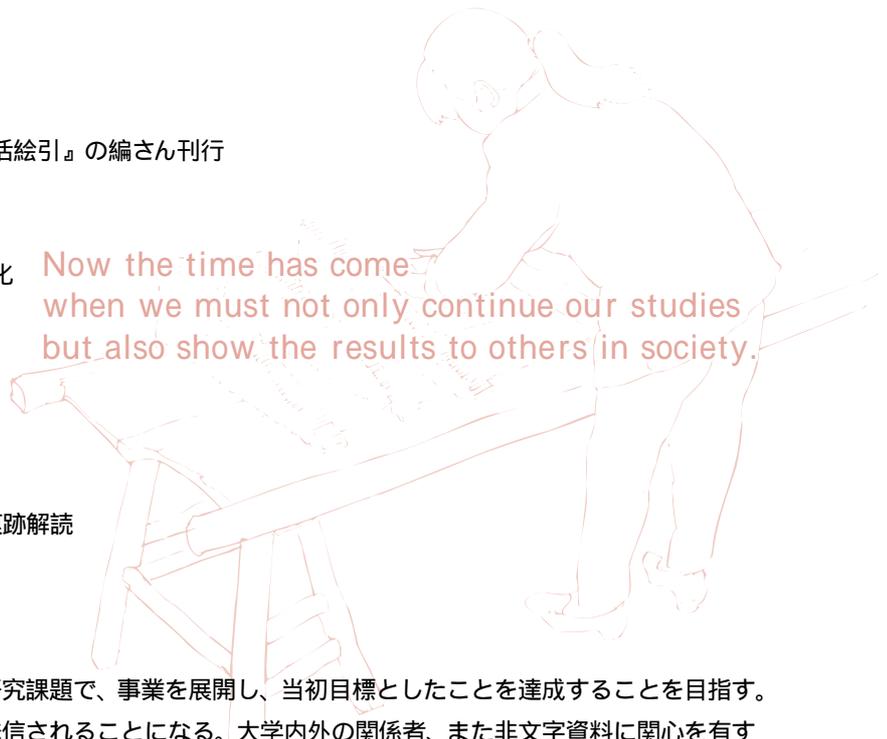
- 3-1 景観の時系列的な研究
- 3-2 環境認識とその変遷の研究
- 3-3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

第4班 地域統合情報発信

第5班 実験展示

第6班 理論総括研究

以上により、本年からは、六つの班、八つの研究課題で、事業を展開し、当初目標としたことを達成することを目指す。いよいよ、プログラムの成果が目に見える形で発信されることになる。大学内外の関係者、また非文字資料に関心を有する研究者の皆さんには、私どもが発信する情報に注目していただくと共に、情報発信の内容や方法について積極的に注文していただきたい。私どものプログラムは5年間で終わるべきものでなく、神奈川大学を拠点に今後も引き続き活動していく意義が十分にあるものと信じており、皆さんの注文や要求が生かされる機会は今後より大きくなるものと予想するからである。



2006年度 課題別研究担当者（事業推進担当者・COE教員・共同研究員）

・課題代表者（印） ・2006年4月現在

第1班 画像資料の体系化と情報発信	氏名	所属部局・職名
1-1 マルチ言語版 『絵巻物による日本常民生活絵引』 の編さん刊行	前田 禎彦	歴史民俗資料学研究所 助教授
	ジョン・ボチャラリ	歴史民俗資料学研究所 非常勤講師 / 東京大学大学院総合文化研究科 教授
	鈴木 陽一	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授
	君 康道	東京大学大学院総合文化研究科 専任講師
	金 貞我	COE教員（非常勤講師）
1-2 『日本近世・近代生活絵引』の編さん	田島 佳也	日本常民文化研究所 教授
	西 和夫	日本常民文化研究所 教授
	福田 アジオ	歴史民俗資料学研究所 教授
	中村 ひろ子	COE特任教授
1-3 『東アジア生活絵引』の編さん	菊池 勇夫	宮城学院女子大学学芸学部 教授
	鈴木 陽一	前掲
	福田 アジオ	前掲
	中村 ひろ子	前掲
	佐々木 睦	東京都立大学（首都大学東京）人文学部 助教授
	金 貞我	前掲